一般社団法人
日本
美術教育学会
会報
2024
07.31

図画工作科を軸とした教科等横断的な学びの展開

大分大学教育学部
准教授
藤井 康子
FUJII, Yasuko

1．はじめに

芸術の創造的な表現活動と鑑賞、感動体験を他教科等の学習の中に逐次的に取り入れることは、児童の知的好奇心や探究力を刺激し、学力を涵養する上で重要となる学びに向かう力・人間性等、OECD が提唱する Habits of Mind [1] を育むことに繋がるのではないだろうか。筆者は、地域の学校や美術館、教育委員会等と連携した教育実践研究に取り組んでいる[2]。近年は、音楽との連携も含めた芸術教育を軸とする STEAM 型学習の開発にも取り組んでいる[3]。

ここでは、これまでの図画工作科（以下、図工）を軸として他教科につなげる・広がる実践を取り上げ、教科等横断型授業における図工の特性という視点からその成果と課題について紹介する。

2．図工を探究の入り口とした教科等横断的な学びの開発

小学校 3 年生を対象とした単元「植物の色の不思議」[4] は図工と理科の体験活動から始まる探究的な学びの単元（全 25 時間）であり、色という観点から様々な学問分野へ広がる学びとして開発・実践した。次年度は、国語科や外国語活動の内容も加えて改良した単元「私の好きな色探し」を開発し、3 年生を対象に実践した。これらの実践は、自然の中にある植物の色をテーマとして図工を軸に理科や国語科、算数科、社会科、外国語活動、道徳、総合的な学習の時間（以下、総合）と横断しながら個々の児童が植物の探究に取り組み、地域の良さや特徴にも気づかせることを目的としたものである。児童の表現力や思考力、学びに対する意識の変容について学習成果物（ワークシートや振り返りシート、作品、新聞、発表）と生活実態調査を基に分析した。学校長の理解と協力を得て、開発した単元を年間指導計画に位置付けて実施するようにした。

以下に、2 年間の実践を通して得られた植物の色をテーマとする探究的な学びの実践内容を示し、その結果について考察する。

（1）実践の内容

① 図工の造形遊び：探究の入り口（6 月）

探究の入り口として、黒い素材（33 種）だけを集めた「黒の遊び」と白い素材（35 種）だけを集めた「白の遊び」を用いた造形遊び[5] を各 45 分実施した。素材を並べたり、つなげたり、積み重ねたりしながら触った感じや色の感じ、光によって色の見え方が変わることに気づかせることをねらいとした。

② 理科×総合とのつながり（10 月）

理科の単元「身近な自然の観察」や社会科と関連させて学校周辺の植物散策を行った。見つけた植物をデジタルカメラで記録させ、気に入った色の植物は持ち帰らせた。記

○事務局　新関伸也
東海大学児童教育学部児童教育学科
e-mail: honbu@aesi.org
○編集部　藤田雅也
〒422-8021 静岡市駿河区小鹿２丁目２番１号
静岡県公立大学法人　静岡県立大学
短期大学部 こども学科（美術教育研究室）
e-mail: fujita@u-shizuoka-ken.ac.jp
tel&fax: 054-202-2687（研究室）
○編集部（会報）　水谷謙孝

録した画像をカラーで印刷し、総合の授業で教師と共に模造紙大の「植物の色マップ」を作成した。採取した植物は押し花にしたりジッパー付きの袋に入れたりして保管させ、図工と関連させて植物の葉や花の色味の変化を順番に並べた色相環を作成した。

③ 理科とのつながり：植物を使った色水作り（11 月）

図工の授業で児童が採取したタンポポやパンジー、もみじなどの植物を用いた色水作りの実践を行った。すり鉢とすりこ木、野菜おろし器などの道具を用意し、自分の好きな色を自分で創り出す方法を考えさせた。理科の見方・考え方を取り入れ、事前に色水の色の違いや変化や結果を予想させ、色水の作り方を考えてから活動に取り組ませた。

④ 国語科（書くこと）とのつながり（11 月）

児童が集めた植物の写真や色水、押し花などを基に好きな植物の色に名前をつける学習を行った。

⑤ 理科・算数科とのつながり：光と色のしくみ（11 月）

植物の色に対する問いや不思議について考えるため、デジタル顕微鏡やカメラを使った観察を行った。200 ～ 300 倍に拡大して花の構造や花粉の形態を観察した。色が見える仕組みについて「光と色」の視点から体験的な学びの実践を行った。

⑥ 総合とのつながり：探究の深まり（12 月）

児童が自ら探究課題を設定し、植物についての理解を深めるための調べ学習に取り組ませた。図工と連動させて、習得した知識や情報から自分で考えたこと、植物への思い、新たに生まれた疑問などを資料（植物標本、植物の写真）や挿絵と共にレポート形式でまとめる学習を行った。

⑦ 外国語活動とのつながり（1 月）

第 3 学年の単元“What do you like?”で習得した英語表現に慣れ親しむ学習として“What color do you like?”を使って自分の好きな色を英語で伝え合う学習を行った。前時までの色水作りや植物の色にも触れながら色を表す英語表現を使った言語活動を行った。

⑧ 総合での探究のまとめ（2 月）

一年間の探究的な学びを振り返り、習得した植物に関する知識・技能、各自で探究した内容を新聞でまとめる学習を設定した。植物の色の魅力を表現し、他者に伝える学習を通して自分の良さ（自分らしさ）を認識することを重視した。

（2）結果

探究の入り口として設定した造形遊びは、児童に「黒って本当に重ねるともっと暗くなる」、「ライトで灰色に変わる」、「白は黒と違って重ねると明るくなる」といった光や色に対する気づきをもたらした。

総合における色マップ作りでは、「植物の色にはばらつきがある」ことや「季節によってある色とない色がある」など色に関する新たな発見がみられた。

色水作りでは、絵の具やインクで作る色水にはみられない経時変化がみられたことが理科とのつながりを生み出した。児童は「もみじの色がうすいオレンジ色で、（中略）一日おいていたらもみじの色がタンポポの色に変わっていた」、「数分たつと色が変わる」などに気づき、自然の現象への関心を高めた。

国語科では独自の色名を創作した児童が既存の色名を当てはめた児童より多く、言語化する能力を高めることにつながった。例として A 児は、紫色のパンジーを「おとなのような色」と名付け「この紫はまるでおとなのような色。わたしも秋が感じられる好きな色」と説明した。植物標本は茶色く変色していたが、おとなという表現に植物への愛着との生命への尊重の態度が現れたといえる。

光の三原色と色に関する体験的な学びは光の吸収や反射の仕組みについて知る機会となり、児童に植物の色に関する深い考察を促した。総合と図工で取り組ませたレポート課題では、例としてB児は、イチョウの葉に「あたたかい黄」と名付け、「イチョウはいろんなこんなんにたちむかっていると思う」という記述とともにイチョウの葉の四季の移り変わりを図で表現した。自然への認識と事象の変化に対する驚きと感動が表れたといえる。

外国語活動では、友人に自分の好きな色を紹介したいという思いが学習意欲に繋がった。色を表す英語と程度を表す形容詞 light、dark、vivid、dull を用いたライトピンクやダークパープル、ビビッドレッドなどの表現、グレープカラーのように食べ物を表す名詞と組み合わせた表現の活用がみられた。

新聞作りでは、「マリーゴールドのひみつ」を花の性質と匂いに分けて説明した内容など色水作りの体験で習得した知識の活用がみられた。「色はかくれています。いろんな紫をさがしにいきたいです」という記述から色に対する概念が深まった児童もいた。

（3）考察

最初の造形遊びでの色に対する気づき（素朴な発見や疑問）は、単元の最後に行った探究の振り返りにおいて「色は 100 色以上あるからそれについてもしりたい」、「色はいろんなところにかくれている」、「どんな色があるかもっと調べたい」といった記述や発言へと変化した。生活に身近な植物の色をテーマとする探究的な学びを年間指導計画に取り入れ、図工を軸として教科横断的に実施した結果、児童の中に生まれた科学的な問い“色とは何か、なぜ色が見えるのか”を追究する知的好奇心や探究心の高まりがみられた。図工を切り口として総合における課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現

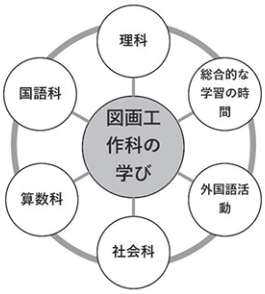

図 1　図工の学びが生み出す他教科等とのつながり

の各段階で図工や理科など他教科との横断・融合を図ったことで学びに深まりが生まれ、児童の中で多様な教科等の学びがつながった（図1）。図工の特性が単一教科の枠を越えた多様な学習の実現を可能にしたと考察する。

３．成果と課題

（１）単元開発の工夫

年間を通して、学級担任と化学を専門とする共同研究者とで児童の実態に即した学習内容の選択や新たな内容の考案、地域との連携、授業実践に取り組むことにより価値観の違いを乗り越え、学問的な広がりや深まりが生まれた。単元開発では、作品や作文などのパフォーマンス課題に適した「逆向き設計」論[6]を援用し、指導内容と方法を工夫した。児童が造形的な見方・考え方を働かせながら植物の色の美しさを感じ取り表現する力、理科の見方・考え方を働かせながら自然の色に関する疑問から探究の問いを設定する力など児童の複数教科の資質・能力を育てる内容を検討した。評価については今後の課題である。

（２）年間指導計画への位置づけ

学習に必然性・達成感をもたせるためには、学校の教育方針や対象学年の課題に加え、学びに向かう力・人間性等を涵養することに関する学級担任である教師の願いを踏まえることが重要である。本実践では“全ての物には美しさが含まれている、それを認めて見つけ出そうとする子どもを育てたい”という教師の願いから、１学期から２学期にかけて「私の好きな色を見つけること」を重視した指導を行い、そこにつながる児童のつぶやきを探究の芽として捉えるようにした。身の回りの自然と色とを結びつけて考える視点を育むために、社会科見学で訪問した地元企業のホオズキの赤、ブルーベリーの紫、自然の緑を他教科の授業でも取り上げた。児童の学習成果物を色で分類し、校内廊下に展示した。３学期の「私の好きな色」を伝え合う場面では、他者に伝える能力と言語化する指導を充実することを重視した。教師が通年カリキュラムの視点を持ち個々の学習をつなげたことで、単元の課題に加えて児童自ら「絵本を作りたい」、「図鑑を作りたい」といった学びの広がりが生まれた。

４．最後に

児童自らが設定した課題を他教科等と横断しながら探究する学習は、言語表現力や色彩表現力など、児童の豊かな表現力、学びに向かう力を育むことに繋がることが明らかになった。図工の学びには様々な教科や領域の要素が含まれており、他教科の学問領域につながる豊かさがある。今後も、実践を通した教育効果の検証に取り組んでいきたい。

【謝辞】

本稿で紹介した実践では西口宏泰先生、原田久美子先生、伊東俊昭先生、生活実態調査では麻生良太先生に多大なご支援とご協力をいただきました。心より感謝申し上げます。実践は科学研究費16H03799の助成を受けて実施したものです。

【引用および参考文献】

１）OECD教育研究革新センター編著、篠原康正・篠原真子・袰岩晶訳、『アートの教育学　革新型社会を拓く学びの技』、明石書店、2016
２）「地域の色・自分の色」実行委員会＋秋田喜代美編著、『色から始まる探究学習　アートによる自分づくり・学校づくり・地域づくり』、明石書店、2019
３）科学研究費「芸術教育を核としたSTEAM型学習モデルカリキュラムと教材開発（課題番号21H00868）」（研究代表者　藤井康子）
４）西口宏泰・藤井康子・原田久美子・麻生良太、「科学的思考力を育む色の探求学習の試み－小学３年生を対象としたサイエンスとアートの教科融合型学習の実践－」、日本科学教育学会研究会研究報告、34巻、4号、pp.13-16、2020
５）大野歩・麻生良太・木村典之・藤井康子・西口宏泰、「幼小期における地域の色をテーマとした探究的学習の研究（Ⅱ）－幼児の学びに向かう姿の分析を中心に－」、『大分大学教育学部研究紀要』、第39巻、第1号、pp.89-104、2017
６）西岡加名恵編著、『「資質・能力」を育てるパフォーマンス評価　アクティブ・ラーニングをどう充実させるか』、明治図書、pp.13-14、2016

あたらしい単位
―自分の感覚を造形化する授業―

岡山県立玉島高等学校 教諭

妹尾 佑介　*SENOO, Yusuke*

１．はじめに

一般的に高校生は、社会性の発達や、多様な知識の影響により、他者の考えや、科学的な整合性、社会的に認められている価値などへの関心が高まる。それゆえ、表現主題も、多様な影響を受けながら生成される可能性が高い。一方で、相対的に自身の身体的なリアリティなど、他者とは共有されにくい主観を基にした表現は影を潜めやすくなる。このことは、生徒の発達の傾向を鑑みれば、ごく自然な成長の一端と捉えられる。しかし、佐藤学が指摘するように、「モノや人と自然に呼応しあう身体[1]」に基づく活動を通して、身体的なリアリティを表現することも、創造的な個を育む上で重要な経験であろう。そこで今回は、個々の経験を想起させ、造形表現活動を通して自分の感覚のリアリティを探究する題材「あたらしい単位」を実施した。単位とは、重さや長さなどを標準化し、客観的に表すために用いるものであるが、本題材では、あえて自分の経験の中で生じた感情などの主観的な要素を、自分なりに定量

化する試みを行わせる。例えば、心躍る喜びの標準として、「友達に髪型をほめられた」ことを「1kd（1ココロオドル）」とし、「遊園地に行く」を「100kd」とする、といった具合に、身近な経験を自ら「発明」した単位を基に、造形表現する。普段、定量的に考えない事柄を単位にする過程で、自分の感情や身体的な感覚に意識を向け、想定した心の動きにふさわしく、納得できると感じられる造形表現を考えられるようにする。このように、自らが考案した単位に基づいて心象を表現するので、色や形の表現の幅が自然と広がっていくと考えた。

2．導入の様子

普段から筆者は、極力生徒への指示を簡潔に短く伝えるように心がけている。説明が長くなるほど、高校生は教師の意図を汲み取り、迎合しようとすることを避けるためである。今回の導入では「新しい単位」についての説明と、単純な事例を１つ挙げたのみにとどめた。例は、その日に生徒がしていた何気ない会話に基づいて話す。あくまで教師と生徒のやりとりの中、この場で主題が生成されているという感覚を、教師、生徒の双方が感じられるように心がけている。そして、今日のテーマや条件が最低限伝わったと感じたら、あとは生徒に委ね、しばらく生徒の様子を見守る。生徒の間では、「何にしよう？」とか「何にする？」といった会話が自然と生まれている。題材によっては、黙々と自分の感覚と向き合う時間も必要であろうが、今回の題材の場合は、まずは自分の人生経験を振り返ることが肝要である。思い出話をしたり、最近あったことを友達と雑談したりする時間が表現主題生成に影響を与えることは少なくない。例えば、思い出話をしていた生徒は「nt（懐かしい）」という単位を生み出した。この生徒は、小学校の運動会で踊ったダンスの曲の記憶や、保育園で毎日飲んだミルクの匂いなど、五感にまつわる記憶を想起し、表現主題を生成している（図１）。このように、身体の記憶を表現することで、概念的な記号などでは表せない表現をしようと試みることができる。他にも「恋のドキドキ」や「気まずいと思う時」など、生徒の日常に即した主題が生まれた。

図１　生徒作品の例「なつかしい思い出（nt）」

3．表現活動

表現主題をいったん決めることができた生徒から表現に取り掛かるが、制作中の会話などの影響で主題を変更する生徒も少なくない（図２）。思った通りにいかずに大幅な変更する生徒だけでなく、よりニュアンスを伝えるための調整のような変更もある。これは、他の人の表現から影響を受けたり、材料に触れたりすることによる影響が考えられる[2)]。

図２ 作品を基に会話する生徒の様子

こうした刺激を与える仕掛けとして、筆者は、材料置き場を教室中央に配置し、自由に多様な材料を試せるようにしている（図３）。また、画用紙も定型版を配付することは少なく、多くの場合ロール紙から自由に取り出して使用できるように指導している（図４）。この環境設定によって、全員の生徒が何度も席を立ち、画用紙や材料を取りにいかなければならなくなる。この時、偶然目にした材料や友達の表現が、新しい表現のアイデアを触発することもある。今回の授業では、偶然綿を見つけた生徒が、スタンピングで表現している様子などが見られた。

図３ 材料置き場（左）と図４画用紙の置き場（右）。画用紙の置き場は教室内に３箇所用意している。

また、今回の授業では、制作過程でマイナス数値を「発明」した生徒が現れた。心がホクホクする様子を「hk」という単位で表現しようとした生徒は、逆に心のホクホクを奪ってしまう出来事を「－hk」というマイナス値で表現した（図５）。この生徒は、当初はプラスの値しか制作していなかったが、クロッキー帳にレイアウトする過程で「マイナスもあったら面白いのではないか？」と思いつき、値を追加したようである。このように、制作中に自身の経験から「いいことを思いつく」ということができ

るような余白を、時間的、空間的、精神的に用意できるような教室環境が重要であろう。

図 5 生徒作品「心がホクホクする感じ（hk）」

4．鑑賞会

鑑賞活動では、エピソードは記載せず、造形作品と「数値」「単位」のみをクロッキー帳にレイアウトした状態で鑑賞しあう。そして、席を移動させ、まったく制作過程が分からない生徒の作品を鑑賞させる。付箋を生徒に配布し、この作品のテーマは何かを予想し、理由とともに記入させる。生徒たちは、友達と予想を話し合いながら付箋を記入していった（図 6）。生徒の中には、作品の造形ではなく「単位」のアルファベット表記から予想した生徒もいた。今回の授業では造形の工夫に着目させる意図があったため、仕掛けの改善が必要だと感じた。その後、生徒は自席へと戻り、自分の作品に貼られた付箋を読む。この時、毎回期待と緊張が入り交ざったような表情を見せる生徒が多い。生徒は友達と話しながら「すごい！あたってる！」、「全然違うんだけど！」などと言い合いながら、付箋に書かれたコメントを読む。「他者から自分の考えはどう見えるのか」という問いは、心理的な安全性が担保されていなければ恐怖を伴うものになる。そのため、できるだけ和やかな雰囲気で鑑賞させるように心がけている。口数が少ない生徒でさえ、この時は、自然と友達と談笑したり、声が大きくなったりする様子が観察できる。造形的な理解を深める時間であるだけでなく、共感や感覚の多様さなどにも気づくきっかけとなる時間であると感じる。

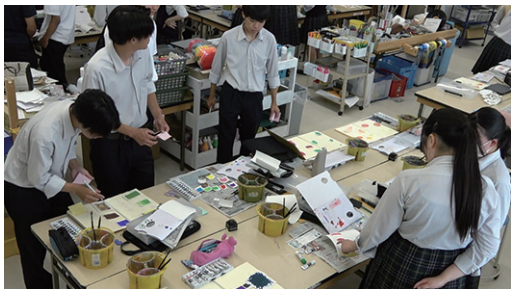

図 6 鑑賞会の様子

5．振り返り

生徒たちの感想は、クロッキー帳へのレイアウトや色や筆致の工夫など多岐にわたっており、造形感覚の視点の広がりが感じられた。生徒の感想の一部を抜粋し、紹介する。

- 他の人の作品を鑑賞してどんなことを表現したいのか考えながら意見を出し合うのが面白かった。今度は画用紙の切り方を今日よりも工夫したい。
- 次からノートへの配置をもっと考えて表現していこうと思った。
- もっと感情を思い出しながら「その時どんな感じだったかな？」と考えながらやっていきたいです。

ただし、こうした前向きな回答だけでなく、1 割程度の生徒は「難しかった」「テーマを思いつかなかった」などといった回答をしていた。こうした生徒への支援を考えることも、今後の課題である。

6．おわりに

今回の授業では、分かりやすく技術を伝えることではなく、自分で表現主題を考える時間に重点を置いた。結果、多くの生徒たちは、自らの経験を基に表現主題を生成し、それを造形的な要素を工夫して表現しようとしていると感じた。一方で、終始戸惑い、困惑して授業を終えた生徒もいた。彼らも、感情を表現する基礎的な技術を教えれば、その通りに表現しようと努力しただろう。しかし、生徒が自ら知識や技術の必要性を自ら生み出すことが、学びに向かう力となると考えている。今回の授業を生かして、さらに多くの生徒たちが、新しい技術や技法をもっと試してみたいと思うような環境設定を今後も考えていきたい。

註

1）佐藤学、『学びの身体技法』、太郎次郎社、1997
2）拙稿、「表現活動に沿った表現主題の変化に影響する因子に関する一考察：言語化された表現主題の変化と生徒と環境との相互行為に着目した分析を通して」、『美術教育学』、第 44 号、2024

学会誌『美術教育』の締切が変わります！

学会誌「美術教育」の投稿締切が変わります。第 309 号は今まで通りの締切で 2025 年 3 月 31 日に発行予定です。

第 310 号からは、**2025 年 5 月 31 日投稿締め切り**で、発行予定が 2026 年 1 月末となります。

お間違えのないようにお願いします。

一般社団法人日本美術教育学会 2024年度（令和6年度） 第1回委員会総会報告

日　時：2024年5月18日（土）14：00～17：00
　　対面及びオンライン会議
場　所：京都市立芸術大学　C棟3F講義室6
出席者：細谷僚一、大橋功、新関伸也、松岡宏明、藤田雅也、詫摩昭人、鳥越亜矢、佐藤賢司、青木宏子、佐藤絵里子、森田ゆかり、吉川暢子、中川泰、大塚習平、鈴木秀幸、水谷誠孝、馬淵哲、足立彰、福井一尊、
（敬称略、順不同）
欠席者；（委任状）清田哲男

- 欠席者からは書面決議書が提出されていることが報告され、委員総会の開催が成立することが報告された。
- 細谷代表理事より開会の挨拶がなされた。
- 議長は新関伸也委員が務めることが確認された。

Ⅰ 審議事項

●第1号議案　2023年度　事業報告

・事務局・総務（新関）

学会webページ作成中。ペーパーレス化に向け、会報や学会誌及び研究発表申し込み、支部活動等の情報掲載ができるよう準備を進めている。公開は夏ごろを予定。

学会誌のリニューアルに向け、記載方式の他学会との共通化や執筆細則の整備を進めている。

会員動向に大きな変動はない。学会委員にも学会運営に協力をお願いする。

・編集部（藤田）

2024年3月31日付で学会誌第308号を発行。投稿論文数は5件だったが、査読の結果、掲載は0件という結果となった。

会報をWeb化した。オールカラーでページ数も増加した。

3学会で協議し、投稿論文の註や奥付の表記の検討を行った。令和6年度は会員への周知の年とし、令和7年度より3学会とも運用を始める。

学会誌の表紙、紙面構成等のリニューアルを進めている。

・会計部（松岡）

粛々と業務を遂行した。

・研究部（清田）

地区委員や委員の推薦者を講師とした連続セミナーを実施。

支部活動を支援し、支部活動の活性化を図った。

・業務部（大橋）

第72回岐阜大会を実施。

大学美術教育学会、美術科教育学会、日本美術教育学会による造形芸術教育協議会（第14・15回）に出席。内容については議事録参照。

美術教育8団体による全日本美術教育会議に出席（2023年6月18日、10月1日）内容については議事録参照。

●第2号議案　2023年度決算報告及び監査報告（松岡）（佐藤・青木）

・別紙

別紙資料に基づき説明がなされ、承認される。

●第3号議案　2024年度　事業計画

1. 2024年度　学会役員（委員及び理事・監査）及び業務（新関）

委員と理事では任期が異なること、佐藤賢司先生は監査と委員を兼ねることが説明された。

2. 第73回 学術研究大会静岡大会について（鈴木支部代表）

最終校正段階の2次案内に基づき説明がなされた。1次案内から変更し、シンポジウムのパネリストが1名追加された。発表件数24件。分科会は3会場。エクスカーションは大会前日8月16日。

3. 第17回 美術教育実践奨励賞候補者推薦について（新関）

なし

4. 第74回 学術研究大会大阪大会について（大橋）

会場：四條畷学園短期大学
会期：2025年8月21日（委員総会）22日・23日
大阪万博の会期と重なるため、宿泊先の早期確保が必要となる。
大会テーマ、大会実行委員長未定。
2024年5月19日に実行委員会開催予定。

5. 学術研究大会研究発表申し込み改訂について（大橋）

現行の大会研究発表申し込み要項に赤字で変更したものを示して説明がなされ、それに対する意見を踏まえて夏の委員総会に案を提出することとなった。主な変更としては、発表申し込み締め切りや発表概要に関する内容である。発表申し込みの締め切りについては大会開催月の4か月前の月末の17:00とすること。発表概要についてはファイルの保存方法、体裁、写真や図表の位置の示し方などである。

6. 学会Webページリニューアル（新関）

HPビルダーで作成中。PDFでは掲載できないため、jpegに変換する必要がある。事業計画、会計、入・退会フォーム、学会誌投稿論文及び大会研究発表概要のフォーマットのほか、各支部活動紹介など

も開設する予定。

7. 学会誌『美術教育』、「会報」デザイン・リニューアル（藤田・新関）

学会誌については、3学会の投稿論文の投稿規程の共通化をすすめ、本学会の投稿論文執筆細則を改定。令和6年度はそれぞれの学会で周知を図り、令和7年度第310号より新しい規定による学会誌となる。それに伴い、表紙や紙面構成をリニューアルする。

会報については令和5年度よりWeb公開となっている。今後、意見をいただきながらリニューアルすることも可能。

8. 学会誌『美術教育』編集について（藤田）

第309号は2025年3月31日発行予定。

第310号から5月31日が投稿締め切りで、発行が翌年1月末となる予定である。また、新しい投稿論文細則が適用となる。これらを周知するための資料を作成し、第309号送付時に同封する予定。

●第4号議案　2024年度収支予算（松岡）

・別紙

別紙予算書をもって説明と提案がなされた。事務局長より、通信費等の増額の要望があり、了承された。また、昨年度6000円しか会費を納入していない会員がいたことを受け、今年度2000円の追加納入を予算化する必要があるとの指摘があった。

II 報告事項

事務局

・造形芸術教育協議会報告

第1号議案業務部報告と同じため、割愛

・全日本美術教育会議

第1号議案業務部報告と同じため、割愛

庶務部

・会員異動報告

資料をもって説明がなされた。

なお、連絡が取れない会員2名については事務局長より連絡を取ることになった。

現在の会員数は372名で、昨年比21名減。退会会員数は昨年の2倍。

編集部

なし

支部報告

関東支部：大阪大会後の研究大会について関東での開催を受け入れる用意がある。

静岡支部：年3回の研究会を実施。昨年度は学会から支部活動補助を受け、森田ゆかり先生の講演を企画した。

愛知支部：南山大学にて第17回東海地区研究会を実施。

滋賀支部：支部活動活性化に向けて努力している。

京都支部：2回の研究会を実施。このうち1回は、第70回大会の記念講演講師西平先生・高木先生をお呼びした。

兵庫支部：支部長欠席のため割愛

岡山支部：2023年8月28日に岐阜大会報告会と交流会を実施。また同年6月には岡山会員の泉谷先生の初回顧展が開催され、笠岡市内の法華寺に奉納される天井画も展示されていた。24年度中には奉納された絵を泉谷先生とともに鑑賞する会を予定している。

鳥取島根支部：島根県立大学にて夏と冬に支部の集いを実施。

最後に、新規委員の先生方からひと言ずつ挨拶をいただいた。

その他

・代表理事より、過去に実践研究奨励賞受賞者によるその後の実践集を発行したが、そろそろ第2号を発行する時期に来ているという意見をいただいた。発行時期は未定であるが、学会誌とは別に発行するか、学会誌の中に特集として掲載するか、今後検討することになった。

・鈴木委員より、静岡大学附属小学校の校舎新築に伴い、旧校舎から古い資料がたくさん出てきたので、静岡大会の会場で配布可能かと質問があり、了承された。

・他団体大会情報

第61回全国幼年美術の会夏季大学

2024年7月27日

全造連　滋賀大会

2024年10月24日、25日

閉会

2024年度　一般社団法人日本美術教育学会　理事・委員名簿

第７期（2023）～第８期（2024）法人役員

	氏　名	所　属
代表理事	細谷 僚一	京都デザイン＆テクノロジー専門学校
業務執行理事（事務局長）	新関 伸也	東海大学
業務執行理事（会計部長）	松岡 宏明	立命館大学
業務執行理事（編集部長）	藤田 雅也	静岡県立大学短期大学部
業務執行理事（研究部長）	清田 哲男	岡山大学
業務執行理事（事業部長）	大橋　功	和歌山信愛大学
理 事	鳥越 亜矢	中国短期大学
理 事	詫摩 昭人	和光大学
監 事	佐藤 賢司	大阪教育大学
監 事	青木 宏子	玩具工房サニープレイス

委員（2024年４月～2027年３月）

	氏　名	所　属
北海道・東北ブロック　委員	佐藤 絵里子	弘前大学
関東ブロック　委員	新関 伸也	東海大学
	詫摩 昭人	和光大学
中部ブロック　委員	藤田 雅也	静岡県立大学短期大学部
	森田 ゆかり	金城大学短期大学部
近畿ブロック　委員	松岡 宏明	立命館大学
	大橋　功	和歌山信愛大学
	佐藤 賢司	大阪教育大学
中国・四国ブロック　委員	吉川 暢子	香川大学
九州・沖縄ブロック　委員	中川　泰	長崎大学
関東（東京）支部代表　委員	大塚 習平	東京都市大学
静岡支部代表　委員	鈴木 秀幸	静岡大学教育学部附属浜松小学校
愛知支部代表　委員	水谷 誠孝	名古屋学芸大学
滋賀支部代表　委員	馬淵　哲	滋賀大学
京都支部代表　委員	足立　彰	京都教育大学附属小中学校
兵庫支部代表　委員	清田 哲男	岡山大学
岡山支部代表　委員	鳥越 亜矢	中国短期大学
鳥取・島根支部代表　委員	福井 一尊	島根県立大学

令和５（2023）年度　一般社団法人　日本美術教育学会　決算

令和６年４月25日

【収入の部】

項目		予算	決算	増減	摘要
1	前年度繰越金	889,367	889,367	0	
2	本年度年会費	3,104,000	2,648,000	▲ 456,000	会費8,000円（会員331名分 回収率88.87%）
			6,000	6,000	6000円を納入した会員が1名
3	過年度年会費	270,000	78,000	▲ 192,000	会費6,000円× 13名
4	購読会員		42,000	42,000	7図書館
5	研究論文掲載料	100,000	0	▲ 100,000	
6	雑収入	5,000	12,120	7,120	学会誌バックナンバー、70周年記念誌
7	協賛会社　広告費	230,000	330,000	100,000	広告料（12社）
合計		4,598,367	4,005,487	▲ 592,880	

【支出の部】

項目		予算	決算	増減	摘要
1	事業費	2,650,000	2,094,497	▲ 555,503	
①	学会誌刊行費	1,390,000	1,307,088	▲ 82,912	
i	学会誌編集費	40,000	29,048	▲ 10,952	査読等送料、消耗品
ii	学会誌編集委員会旅費	150,000	281,550	131,550	学会誌　査読・編集委員会旅費
iii	学会誌印刷費	1,200,000	996,490	▲ 203,510	『美術教育』308号× 450部
②	会報発行費	60,000	48,400	▲ 11,600	会報153号、154号版下作成、サイトアップ
③	会員名簿印刷費	0	0	0	令和3年度に印刷作成（今後はWeb化を検討）
④	学術研究大会補助費	300,000	300,000	0	第72回岐阜大会
⑤	研究集会費	300,000	100,990	▲ 199,010	支部活動支援費、オンライン連続セミナーの資料代
⑥	HP管理運営費	50,000	0	▲ 50,000	
⑦	通信費	150,000	65,512	▲ 84,488	会誌・会報・大会案内等の発送
⑧	造形芸術教育協議会費	0	5,275	5,275	美術教育9団体連絡会議参加分担金
⑨	奨励賞積立金	150,000	50,000	▲ 100,000	1件
⑩	教関学会連絡協議会費	10,000	10,110	110	会費、振込手数料
⑪	事業旅費	100,000	78,712	▲ 21,288	各協議会旅費
⑫	法人関係諸経費	20,000	15,990	▲ 4,010	法人登記にかかる諸経費
⑬	選挙関係	120,000	112,420	▲ 7,580	封筒代、印刷費、送料等
2	会議費	360,000	373,081	13,081	
①	理事・委員会費	50,000	9,000	▲ 41,000	第2回理事会昼食弁当代
②	事務局会費	10,000	1,000	▲ 9,000	会計報告用資料印刷
③	会議旅費	300,000	363,081	63,081	理事・委員旅費(大会前日は除く)
3	事務局費	650,000	432,459	▲ 217,541	
①	部会運営費	40,000	40,660	660	編集部・会計部・研究部・事業部運営、振込手数料
②	通信費	20,000	17,822	▲ 2,178	事務連絡・依頼書等郵送料
③	事務消耗費	130,000	62,062	▲ 67,938	事務消耗品、封筒など
④	事務委託費	250,000	250,000	0	名簿管理、会員への各種連絡、発送関係
⑤	アカウント使用料	150,000	49,596	▲ 100,404	DropBOX、wifi契約料
⑥	雑費	60,000	12,319	▲ 47,681	筆耕、資料印刷等
4	予備費	938,367	0	▲ 938,367	
合　計		4,598,367	2,900,037	▲ 1,698,330	

収入の部－支出の部＝1,105,450　次年度へ繰り越し

上記の通り報告致します。　　会計部長　松岡 宏明

上記の通り相違ないことを認めます。　　会計監査　佐藤 賢司

青木 宏子

令和6（2024）年度　一般社団法人　日本美術教育学会　予算

令和6年5月18日

【収入の部】

項目		前年度決算	予算	増減	摘要
1	前年度繰越金	889,367	1,105,450	216,083	
2	本年度年会費	2,648,000	2,960,000	312,000	会費8,000円×370名
		6,000			6,000円納入者
3	過年度年会費	78,000	474,000	396,000	会費8,000円×50件、会費6,000円×12件、2,000円1名
4	購読会員	42,000	42,000	0	6館
5	研究論文掲載料	0	100,000	100,000	5編
6	雑収入	12,120	5,000	▲7,120	学会誌バックナンバー
7	協賛費	330,000	330,000	0	広告料（12社）
合計		4,005,487	5,016,450	1,010,963	

【支出の部】

項目		前年度決算	予算	増減	摘要
1	事業費	2,094,497	2,651,000	556,503	
①	学会誌刊行費	1,307,088	1,540,000	232,912	
i	学会誌編集費	29,048	40,000	10,952	査読等送料、消耗品
ii	学会誌編集委員会旅費	281,550	300,000	18,450	学会誌　査読・編集委員会 旅費
iii	学会誌印刷費	996,490	1,200,000	203,510	『美術教育』309号×450部
②	会報発行費	48,400	60,000	11,600	会報155号・156号（Web版）
③	会員名簿印刷費	0	0	0	令和3年度に印刷（今後はWeb化を検討）
④	学術研究大会援助費	300,000	300,000	0	第73回静岡大会
⑤	研究集会費	100,990	300,000	199,010	支部活動支援費、委員によるオンライン連続セミナーの資料代など
⑥	HP管理運営費	0	50,000	50,000	
⑦	通信費	65,512	150,000	84,488	会誌・会報・大会案内などの送料
⑧	造形芸術教育協議会費	5,275	20,000	14,725	全日本美術教育会議への拠出金を含む
⑨	実践研究奨励賞奨励金	50,000	100,000	50,000	
⑩	教関学会連絡協議会費	10,110	11,000	890	会費、その他
⑪	事業旅費	78,712	100,000	21,288	各種協議会等旅費
⑫	法人関係諸経費	15,990	20,000	4,010	法人登記にかかる諸経費
⑬	選挙関係	112,420	0	▲112,420	本年度はなし（封筒代、印刷費、送料、受取金払い等）
2	会議費	373,081	460,000	86,919	
①	理事・委員会費	9,000	50,000	41,000	会場費 など
②	事務局会費	1,000	10,000	9,000	会場費、資料印刷費 など
③	会議旅費	363,081	400,000	36,919	理事・委員旅費（全額支給）※大会前日は除く
3	事務局費	432,459	620,000	187,541	
①	部会運営費（事務局を含む）	40,660	50,000	9,340	事務局・編集部・会計部・研究部・事業部の運営
②	通信費	17,822	20,000	2,178	事務連絡郵送料他
③	事務消耗品費	62,062	100,000	37,938	事務消耗品、封筒新規作成費 など
④	事務委託費	250,000	300,000	50,000	名簿管理・発送関係委託料
⑤	アカウント使用料	49,596	100,000	50,404	DropBOX、Zoom、Googledrive契約料
⑥	雑費	12,319	50,000	37,681	その他
4	予備費	1,105,450	1,292,450	187,000	次年度繰越金
合　計		4,005,487	5,023,450	1,017,963	

美術教育雑感

生成 AI が先生 AI に？ － 美術教育への誤解と軽視

今年の６月上旬、図画工作科や美術の授業に生成 AI を導入するというニュースが報道されました。これまで、美術関係の生成 AI についての話題は、そのほとんどが、生成 AI による画像や動画の創出についてでした。今回も「またか」と思いましたが、よく読むと『指導難しい図工と美術に生成ＡＩ活用、子どもと対話重ね個性や関心引き出す…群馬県教委が導入へ』(読売新聞，2024/6/3) とあります。

生成 AI が子供と対話を重ねて、個性的な発想を引き出すというのです。これには、驚きました。これは、現行の学習指導要領における資質・能力で示される「思考力、判断力、表現力」に関わる所、つまり「発想や構想」に関わる指導を AI が担当するというのです。

「そんなことがあるものか？」と思い記事を読んでみると、「子どもたちが作品を作ろうとする際、タブレット端末で疑問を書き込むと、ＡＩは『なぜそう思ったの？』『何が好きなの？』と対応。質問に対して画一的な答えを教えるのではなく、子どもが自ら答えを出すように促す。」とあります。そして「県教委によると、小学校では教員免許が科目ごとに分かれていないため、図工に関しては教員の指導力の差が大きい。中学校の美術については専門の免許を持っている教員が少ないという課題がある。」とのことです。

「ちょっと待てよ！」心の底から声になって出てしまいました。子供の発想や構想を促す指導や支援というのは、その題材（単元）の最も主たる部分であり、各自が主題を生成する場面に関わるものです。その授業がどのような目標で行われているのかによっても対話の内容は大きく異なります。それ以上に、同じ経験をしても、個々の内面に生成されるイメージは全く違うものになります。

いくら、指導力の差が大きいと言っても、ここに教師が関わらなかったらどこに関わるというのか。また、指導をしないでおいて、評価ができるはずもありません。おそらく、「思考・判断・表現」に関する評価も危うくなるでしょう。

もちろん、一人の教員が 30 人を超えるクラスの子供一人一人と丁寧に対話し、発想や構想を導くというのは難しいことです。だからこそ、全体への指導と個々への支援を適切に組み合わせるなど、授業の工夫をするのです。そこに、生成 AI を効果的に導入することは考えられなくは無いでしょう。しかし、そのためには、相当な教科指導の専門性や教科を超えたところでの授業構成力、授業力が求められます。そもそも、小学校では、教科の特性さえ理解できれば、授業がきちんと出来る教師であれば、同じようにきちんとした授業は出来るはずです。教科特性の理解が不十分であるというのなら、教員養成段階や現職教育の充実に予算を割くべきでしょう。中学校での免許外指導に関しては論外で、不法状態を正当化するような理由です。

私は保育園や幼稚園をはじめ、様々な所で美術教育の具体的な授業改善などについて，先生方にアドバイスを行っていますが、間違いなく美術教育の授業実践力は高まって行きます。美術教育の専門性は、美術の専門性よりも、指導力や授業構成力といった教育実践者としての専門性のほうが重要なのです。ましてや免許外の教師が AI を使ってなんとかなる教科だと言われているのです。看過できませんね。この件の根底には「美術」という教科に対する深刻な誤解と軽視があります。文科省はこの計画にストップをかけるべきでしょう。このような「実験」を安易に行うべきではありません。

しかし、こうした誤解や軽視は、美術教育に取り組む私たちの実践が産み出しているとも言えます。決まりきった構図や描き方を押しつけるような指導法頼りの授業、作品の見栄えを気にした過度な技術指導、あるいは「自由」をはき違えた放任など、美術教育を行う側にも深刻な誤謬があるのです。

また、養成校でも、イラストの切り抜きを並べたような壁面装飾や、パーツを組み立てるだけの工作をいまだに見かけます。自己実現に向かい創造性を発揮しながら成長していく美術の学びの真髄を伝えることができているのでしょうか。自分自身も、今一度振り返りながら、美術教育への誤解と軽視を解きほぐしていかねばならないと自戒するのです。

大橋 功（一般社団法人日本美術教育学会 理事・和歌山信愛大学　教授）

第73回日本美術教育学会静岡大会のご案内

大会テーマ
アートの意義と教育における存在価値を見つめる

大会会場
静岡県立大学 小鹿キャンパス
〒422-8021　静岡市駿河区小鹿2丁目2-1
■ JR「静岡駅」下車バス15分。
・『JR静岡駅北口8番バス乗場』から「美和大谷線（静岡大学・東大谷方面）」に乗車した場合は、『小鹿局前』で下車徒歩3分
・『JR静岡駅南口21番バス乗場』から「みなみ線（外回り）」に乗車し『県立短大』下車（三菱電機前経由に乗車した場合のみ）すぐ、または『小鹿局前』で下車徒歩3分

日程と内容について
＜8月16日＞
・午後：理事会、委員会
・午後：エクスカーション（静岡県立美術館）
＜8月17日　大会1日目＞
・午前：開会行事、基調提案、研究発表
・昼：総会
・午後：研究発表、記念講演
・夜：懇親会
THE　PENTHOUSEにて開催（静岡市葵区伝馬町1-2　ホテルシティオ静岡9F、JR静岡駅から徒歩10分）
＜8月18日　大会2日目＞
・午前：研究発表
・昼：第6回「研究論文・実践報告の書き方初級セミナー」
講師：松岡宏明（編集部・立命館大学産業社会学部 教授）、藤田雅也（編集部・静岡県立大学短期大学部 教授）
研究論文や実践報告の書き方初級セミナーを企画しています。どうぞ奮ってご参加ください。
・午後：研究発表、共同討議、次期開催地挨拶（大阪大会）

基調提案
鈴木 英司（浜松市秋野不矩美術館 館長）

共同討議
＜コーディネーター＞
藤田 雅也（静岡県立大学短期大学部 教授）
＜パネリスト＞
鈴木 英司（浜松市秋野不矩美術館 館長）
有川 貴子（浜松市立中ノ町小学校 教諭）
鈴木 まき子（元 浜松市立幼稚園長会長・元 聖隷クリストファー大学　准教授）
鈴木 光男（聖隷クリストファー大学国際教育学部 教授）

記念講演
「科学と技術と芸術と
～学校教育におけるアートの役割～」
尾池 和夫 氏（静岡県立大学 第7代学長・理学博士）

会員異動

（会報No.154号発行日以降届出分・敬称略）

【新入会員】入会順・敬称略
山口　敦士　甲陽学院高等学校 美術非常勤講師
篠永　　洋　東北文教大学 准教授
須長　正治　九州大学大学院芸術工学研究院 教授
白石　桃香　戸田市立新曽小学校 教諭
角尾　　弘　学習院大学理学部 講師
山本　将之　大阪大谷大学 准教授
山竹　弘己　静岡市立清水第一中学校 教頭
遠藤　早姫　認定こども園　さくら台幼稚園
谷村さくら　大阪教育大学特任准教授
市原奨太郎　兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科 教員
藤重　育子　姫路大学教育学部 准教授

【異動】届出順・敬称略
松岡　宏明　立命館大学 産業社会学部 現代社会学科 教授
丸山　磨美　大阪樟蔭女子大学児童教育学部児童教育学科 准教授
野網　　学　大阪教育大学附属池田小学校 教諭
佐藤　尚宏　岡山短期大学幼児教育学科 准教授
鈴木　秀幸　静岡大学教育学部附属浜松小学校 校長
桶川　千秋　無所属
福士ちのり　山形県鮭川村立鮭川小学校
入口　　愛　愛知学泉短期大学幼児教育学科 准教授
乾　　茂樹　京都市立西京極中学校 校長
野田　朋子　京都市立加茂川中学校 教諭
幸田　瑞穂　頌栄短期大学 専任講師
伍　翔　南　早稲田大学教育学部教育学専修 助手
横田　咲樹　社会福祉法人 橘会 御南認定こども園

【退会】順不同・敬称略
渡邊一翔／名古屋造形大学図書館／佐藤哲夫／濱口由美／澁谷美求／稲實　順／朝野浩行／片桐　彩／溝田宏朗／鈴木典明／保木井啓史／杉浦央子／大髙幸／小倉　隆／髙橋直子／山本暁美／佐伯岳春／三浦高之

異動があった場合は、なるべく早く本部（E-mail: honbu@aesj.org）までお知らせください。